
魔法学園《聖フィオルネ高等部》

ダークネス

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

魔法学園《聖フィオルネ高等部》

【Nコード】

N0409I

【作者名】

ダークネス

【あらすじ】

魔法学園聖フィオルネで起きる魔法によるハプニング！そして徐々に明かされる100年前の真実！それを説き明かす少年の恋愛？ファンタジー小説

プロローグ

「消えればいいんだ！

こんな国・・・消えちゃえばいいんだ！」

回りには炎が燃え盛っており

ガレキやガラスが飛びちっていた

その中一人佇む少年は身の丈以上の大鎌を持ちその回りにはいくつもの頭と胴体が別れている死体が転がっていた

「俺は悪くない

悪いのはこの国・・・

そつだ燃えちゃえ

全て・・・消えてしまえばいいんだ」

叫ぶと少年はその場に倒れ突如地面に開いた穴に落ちていった
その後間もなくして大爆発が起きた

この一人の少年によって滅ぼされた都市の名を

「ナグナ」といい

この事件は後に史上最悪の事件

「ナグナの惨劇」と語り継がれ

少年は身の丈以上の大鎌に黒い炎を纏っていたことから

「黒炎の死神」と呼ばれることになる

ナグナの惨劇から
約100年

「父さん、行つて来るよ」
青髪で翡翠の瞳の少年が
門に立つ男に告げる

「ああ

当分は会えないだろうけど
頑張つて来い

たまには連絡よこせよ」

父さんと呼ばれた男は少年の頭を撫でる

「わあつてるよ

子供扱いするな！／＼」

次に合う時は父さんを越えてやるからな！」

「ハッハッハッ

俺を越えるか・・・

楽しみにしとくよ」

「・・・・・・バカにしゃがつて覚えとけよ絶対に越えてみせる・・・・
・・じゃあなくそ親父」少年はその場を後にする

「俺を越えてみる・・・・・・

リヨウ

小さくなっていく自分の息子の背中を見ながら呟く

「リヨウ」

おはよう

「おおおはよう

ミズキ

「えへへ／＼」

「何朝からニヤニヤしてるんだよ」

「だってリヨウと同じ高校に行けるから嬉しくて／＼」

「まあ知らん奴ばかりよりはミズキでもいた方がいいかもな」

「リヨウは私と一緒に嬉しくないの!？」

「冗談だって俺もミズキと一緒に嬉しいさ」

「本当!？」

「当たり前だろ? 幼なじみだし困ったことがあれば相談できるし」

「えへへ／＼当たり前かあ／＼」

こいつは幼なじみの
シュリー・ク・ミズキ

いつも俺と話す時はこんな感じだな・・・

「早くしないと初日から遅れるぞ！」

「ああゝ！もう待ってよゝ」

「待たん！」

おまえが遅いんだからおまえが早く来ればいい話しだろ！」

「だって荷物重いんだもゝん」

「ハア

持ってやるから

早く行くぞ」

ミズキの鞆を奪い取る

「いいよ

悪いし」

「いえいえかわいい女の子にこんなに重い物は持たせれませんよゝ」
(こいつのスピードに合わせて行くのは怠いしな)

「か　かわいい！？／＼」

何かが爆発した音がしてミズキが止まった

(いちいち正気に戻すのもめんどくさいし
置いて行くか)

その後ミズキが正気に戻ったのはリョウが完全に見えなくなっ

ら
だ
っ
た

「ここか・・・今日から俺が通う聖フィオルネ学園高等部」
ちなみにミズキはいない

「いや〜」

無駄にでかいなあ」

（つてかでかすぎるだろ

・敷地内に森は必要なのか？とりあえず寮に行かないとな）

学園のパンフレットを取り出す

（寮はあっちか）

パンフレットを見ながら寮に向かう

「ちよつと！」

声が聞こえたので辺りを見渡すが誰もいない

（気のせいかな）

「ねえってば！」

再び聞こえたのでまた辺りを見渡すが誰もいない

（もしかしてこれは学園七不思議？スクープになるぞ〜！）

「上よ！」

（上？）

言われた通りに上を見ると木の上に金髪のツインテールの女の子がいた

（学園の七不思議じゃないのか・・・期待させやがって）

「この学園は木登りが流行りなのか？」

「違うわよ！」

猫が木から降りれなくなっていたから助けようと思って・・・」

「猫なんかいないじゃねえか・・・」

「わ 私が登ったら自分で降りて行っちゃったのよ！」

「へえご苦労様

じゃあな」

手を振りその場を去ろうとする

「降りれないのよ

助けなさい！」

「降りれないのに登るなよ・・・バカかおまえ？」

（しかも命令系！？）

「しかたないでしょ

以外と高かったのだから」

「・・・で俺にどうしろと？」（・・・助けを求めているくせに随分と偉そうだな・・・）

「・・・脚立を持って来て」

「嫌だ

なんでそんな怠いことを・・・」

「じゃあどうするのよ」

「もつと善人が通るのを待つことだな」

（そのうちミズキが来るだろうし）

「呼んで来てよ」

「わかった

今日ホームルームがあれば議題に出しとくよ題名は《木に登り降り
れない猫女を助けよ》つとこだな」

「誰が猫女よ！・・・もういいわ邪魔だからどっか行って！」

「そうかい

じゃあまたな」

「待ちなさいよ」

「邪魔なんじゃないのかよ！？」

「飛び降りるから受け止めて！」

「えっ」

（めっちゃめっちゃだなこの女）

「行くわよ」

言うや否や飛び降りた

「バカ野郎！どこ飛ぶつもりだ！
ちゃんと目開ける！」

「キヤ」

俺は見当違いの方向へ目を閉じながら飛び降りた猫女をなんとか受け止めたが
バランスを崩し倒れた

「いたたた・・・
ちゃんと受け止めてよね」

（助けてやったのに
無茶苦茶だなこいつ・・・）

「ちょっと聞いているの！？」

「あゝ
とりあえず退け」

今の状態は傍から見ればこいつが俺を押し倒しているように見える

「っ／＼／／」

猫女は慌てて俺の上から退いた

「もう木登りするなよ
じゃあな」

「痛っ！」
振り向くと足を抑えていた

（捻挫でもしたのか？
まあとりあえずこいつとはこれ以上は関わりたくない）
無視して去ろうとする

「待ちなさい！

女の子が捻挫しているのに無視する気？」

「自業自得だろ？

被害者は俺だぞ

無視されたくないならば態度を改めることだな」

「う・・・わかったわよ

寮まで送って下さい」

「却下」

「何だよ！改めたじゃない
送りなさい！」

「なんで初日から女子をおぶって女子寮に行かなきゃいけないんだ！
初日から変な噂が立つだろうが！」

「私だって我慢するのだから
送りなさい」

「バカなのかおまえ！？おまえのためになんで俺が我慢しないとい
けねえんだよ！
ふざけるな！」

「女の子を一人でこんな所に置いて行って平気なの！？」

「全然！余裕だ」

「あつそ

わかったわよ

じゃあもう行きなさいよ」

「ああ行つてやらあ」

俺はもう引き止められないように走つてその場を後にした
後ろから

「ええ本当に行くの！？」とか聞こえたが気のせいでしょう

(くそ……)

猫女のせいで無駄な時間を……)

俺はようやく男子寮に入ることが出来た
ちなみに俺は一階の一番端の部屋だった

(……ここか)

「お邪魔します」

なんとなくノリで言う

「いらつしゃい」

若葉色の髪の方が何故か中に居た

「ハハハ

すいません部屋間違えました
ではさようなら」

俺は部屋を出る

「はいさようなら」

(ええと

確か俺は150室だよな)
部屋の表札を見る

(……合ってるじゃねえか
さっきのは幻覚だな)

「お邪魔します」

「いらつしゃい」

再び男が挨拶をしてくる

「なんで居るんだよ！いらつしゃいじゃねえよ！
部屋間違えているぞおまえ」

「合ってますよ

レギナ・ド・リヨウさん」

「なんで俺の名前を？」

「そう警戒しないで下さい
聞いてないのですか

一年は二人一部屋なのですよ」

「……全く知らなかった」

「部屋の番号が書いてある下にそのこととルームメイトの名前が書
いてあるのですが……」

「マジ？」

パンフレットを開き部屋の番号
が書いてあるページを開く

（……しっかり書いてあるじゃねえか）

そのページにさらに

グラゴ・ル・シュウという名前も書いてあった

「ええと悪いな

とりあえずおまえのことはシュウでいいか？」

「はい

問題ありません」

「了解

じゃあ俺もリョウでよろしく」

「こちらこそ

ふつつか者ですが一年よろしくお願いしますねリョウさん」

(・・・丁寧過ぎてやりにくいなあ)

「それよりもリョウさん荷物多いですね」

「・・・あ

ミズキの持ってきちゃった」

「ミズキさん？

お友達でしょうか？」

「ああ幼なじみだ

まあ後で取りに来るだろうし

置いてくか」

「もうそろそろ入学式が始まるので行きませんか？」

「そうだな

行くか」

シュウと部屋を後にする

(うう)

置いて行くなんてリョウ酷いよ
荷物もないし

お財布持ってたよ

「ねえ」

「え？」

辺りを見ても誰もいない

(気のせい?)

「下よ
し・た」

「ふえ？」

あれ？座ってたの？」

「バカ男のせいで捻挫したのにそのバカ男にここに放置されたのよ
！」

「ひ 酷い！」

怪我をさせられて放置するなんて・・・」

「でしょう？」

本当！男なんて皆最低なんだから」

「でも少なくとも

私の幼なじみの男の子は優しいよ

捻挫している人なんてみたら助けずにはいられないって人なんだよ
」

「・・・本当にそんな男いるのかしら？」

「いるよ！

とりあえず肩に掴まって！」

「ありがとう

そういえばあなたの名前は？」

「私？

私はシュリー・ク・ミズキ
ミズキって呼んでね〜」

「え！？」

「ふあ？

いきなりどうしたの？」

「ミズキって私と同室の人じゃない！」

「ふえ？

じゃああなたはルルナ・ス・ユキさん？」

「ええそうよ

「凄い偶然ね」

「えへへ」

「そうだね」

「そういえばユキさんは荷物どうしたの？」

「ユキでいいわよ」

「私は一回帰って学園内を少し散歩していた所だったから
そういえばミズキこそ荷物はどうしたの？」

「さっき話していた幼なじみの子が持って行ってくれたよ？」

「へ」

「気はきくのね」

「うん！」

「とっても優しいんだよ」

「ふ〜んなるほどね」

「どうしたの？」

「ミズキその子のこと好きなんだ！」

「ふえ／＼ち 違うよ」

「そんな顔赤くして言っても説得力無いわよ
正直に言いなさい」

「あ！／＼」

へ 部屋に着いたよ」

「しかたないわね

今はごまかされてあげるけど

その幼なじみの子を紹介してね

ミズキが好きな子位知つときたいし」

「ふえゝゝ／＼

違うつてばゝゝ／＼」

「じゃあ私が誘惑してもいいの？」

「だ 駄目だよ！」

「ほら

好きなんじゃない」

「ふえゝゝ／＼」

「まあミズキはかわいいから大丈夫よ頑張つてね
そろそろ出ないと入学式に間に合わないわよ」

「ふえゝゝ／＼

待つてよ」

「今から第99回聖フィオルネ高等部の入学式を始めます
最初に校長先生の祝辞です」

「新入生の皆さん入学おめでとうございます
第99回入学式

ナグラの惨劇の翌年からこの学園は創立されました
二度とあのような惨劇を起こさないよう正しい魔法の知識を覚え
たとえ惨劇が繰り返されるようなことがあっても皆さんが大事なも
のを守ることができるようこの学園で魔法について学んで欲しい
と思っています」

「校長先生ありがとうございます続きまして
学園におけるマジックランクについての説明です

魔法最高責任者のサジ・グ・ルーク先生お願いします」

「新入生諸君入学おめでとう

早速だがマジックランクについて説明するマジックランクは15段
階あり

最低はEから始まり

D - , D , D + , C - , C , C + , B - , B , B + ,
A - , A , A + , S , S S

と別れており

最初は全員Eランクから始まる

そしてランクが高ければ高い程この学園では優遇されるから頑張っ
てランクを上げる

ランクを上げるには魔法ポイントが必要で魔法ポイントは魔法にで

の実技やテスト、魔法のイベントなどで自動的に魔法ポイントは貯まっていき一定のポイントが貯まるとランクが上がるもちろん成績が優秀であればあるほど魔法ポイントは高く加算される
まあそんな所か

質問があればまた各自で聞きに来い・・・以上だ」

「ありがとうございます

これで第99回入学式を終わります

起立

礼

新入生のみなさんは退場して下さい」

（なげえよ！

本気で眠い）

「眠そうですね」

「・・・・・・・・・・・・・・・・ああシュウが眠そうじゃなくて眠いんだ」

「今の間は何ですか？
もしかして僕のことを覚えていなかったなんてことはもちろんありませんよね？」黒笑「」

「あ あたりまえだろ？
お おれがシュウをわすれるわけないだろ（棒読み）」
（こいつが黒属性だったとは）

「ふふふ（黒笑）」
そうですね
それよりもあちらでクラス表が張り出されているので見に行きましよう」

「イエッサー」

「ユキ」

入学式が長いよ〜
眠いよ〜

「ほらしゃきつとしなさい!」

「ふえ〜ん」

「あっちづクラス表張り出しされてるらしいし行きましょう」

「ふえ眠いよ〜」

「愛しの幼なじみ君と同じクラスが見ないでいいの〜?」

「だからそんなんじゃないってでも 早く行こう? / /」

「はいはい」

(本当に扱いやすいわね)

「シュウは何組だった？」

「僕はG組でしたよ
リヨウはどうでしたか？」

「マジで？」

俺もGだぜ

いや、シュウと一緒に改めてよろしくな」

「こちらこそよろしくお願いします」

「じゃあ教室行こうぜ」

（そういえばミズキは何組だろうな）

「どう？愛しの幼なじみ君とは同じだった？」

「うん！

って愛しとかそんなんじゃないって／＼」

「同じクラスかあゝよかったねゝ」

「もう！／＼ユキは何組？」

「私はG組よ」

（本当に扱い易いわねゝそれにかわいいし）

「本当！？

じゃあユキとも一緒だあ！

ヤッター」

「幼なじみ君のクラスは探して私のクラスは探してくれないのね
所詮友情は愛情には勝てないのね・・・」

「ユキは近くにいたからだつてゝ！

それに愛情なんかじゃないってば／＼」

「それでも幼なじみ君と同じクラスになったという時と
私と同じクラスになった時とじゃ反応違ったわよ！」

「だから一緒だつてば／＼／

もういい

早くクラスに行こう」

「そんなに早く会いたいの？」

「だっからっ違っう！ってばっ／＼」

「ふふふ」

（からかいがあるわね

それにしてもミズキにこんなにも思われている幼なじみ君が気になるわね

同じクラスみたいだし

ミズキみたいにかからかいがある奴がいいわね

ただあのバカ男の所在も気になるわね

見つけ次第……

どうしようかしら？

「席は名前の順番みたいだな
じゃあまた休み時間な
おやすみ」

「おやすみって・・・
早いですね
もう寝てますし」

「ZZZ」

「ここみたいだよ」

「ふふふ
早速ミズキの幼なじみ君を教えてくれるかしら？」

「うん
えつとね
いたいた！」

あそこで寝てるよ!」

「初日から寝てるって・・・」

「リヨウはおはよう」

「ZZZ」

う・・・んミズキ?

眠いんだn『あゝ!あの時のバカ男!』・・・誰だよっせえな・・・」

「あなたのせいでミズキが来るまでずっと動けなかったのよ!」

「・・・・・・ミズキ

誰だこのうるさいの」

「えっとね」

私と同室のユキだよ!」

「そうか

サンキューなミズキ」

「えへへ／＼」

「え」と

どっかで会ったことあったけ?

そして何を怒ってるんだ?」

「覚えてないの?

朝校門で捻挫した私を放置していったでしょう!」

「あああの時の猫女かあゝゝ」(ハアもう関わりたくなかったのに・
・・)

「誰が猫女よ」

「お互い様だろゝ

おまえだって俺を押し倒して来たんだしさゝ
痛かったぞ」

「ユキがりヨウを押し倒す・・・」

「違うわよミズキ

あなたも誤解されるようなこと言わないで!」

「あゝ

もううるせえゝ

どうだっていいから寝かせろ
じゃあおやすみ!」

「ちよつと」

「ZZZZ」

「早っ!」

「ユキゝ

先生もうすぐ来るよ
席に座ろつ」

「そうねって私ね席は・・・こいつの前!？」

「だってレギナとルルナじゃん!名前の順番だと近くになるじゃん」

「もう最っ悪!」

「大丈夫だよ!

リヨウは優しいんだから
じゃあ私も席に座るね」

「はあ」

「ZZZZ」

「すやすやとむかつくわね
殴っていいかしら?」

クラスの心が一つになった

「そりや何よりだな・・・で結局先生は何歳なんだ？」
(少なくとも精神年齢はそれくらいもしくはそれ以下だな)

「まあ気分いいから教えてあげるよ
今年で20歳だよちなみに独身だよレギナ君」

男子の歓声上がる

「へえーじゃあまだ19歳？」

(何故かミズキから痛い位に視線が飛んでくるぞ)

「そつだよ！結婚もレギナ君だったら大歓迎だよ」

「そつか

まあ考えとくよ」

(痛い！

ミズキからの視線が痛くなった！

魔法で視線強化でもしてるのか？)

(うつゝ

リヨウが考えとくつて言ったゝゝわ私も言ってみようかな！？／＼)

(ふふふ

こいつも中々からかいがあるかもね・・・後こいつフェミニストね)

「じゃあ次はみんなが自己紹介してよろしくね」

「じゃあ次の人」

・ ・ ・ ・

「はい僕の名前はグラゴ・ル・シュウです
至らない点が多くて迷惑を掛けると思いますがよろしくお願いします」

（相変わらず丁寧だなあ）

（ふあ）

優しそうな人だな（）

・ ・ ・ ・

「私の名前はシュリー・ク・ミズキでしゅ
あ・・・噛んじやった

よろしくお願いしましゅ

うう・・・・また噛んじやった／＼」

（くくく）

やっぱりミズキ最高だな（）

（さすがミズキね

期待を裏切らないわ)

(彼女がリヨウの幼なじみですか
性格は似ていませんね・・・)

・ ・ ・

「私はルルナ・ス・ユキよ

これからよろしくねちなみに魔法は結構自信あるわよ」

(自己紹介でも気の強いやつだな・・・)

「じゃあレギナ君だね

どうぞ」

「ああーレギナ・ド・リヨウよろしくな」

(ううー)

女の子が皆リヨウを見て顔を赤くしてるよ)

(まったくもつと何かないのかしら

そしてこいつのなにがいいんだか・・・

確かに顔はいいけど・・・そう！大事なのは性格よ！せ・い・
か・く！それに魔法だってこいつはヘナチヨコよ！私がぶっ飛ばし
てやる)

(リヨウは早速人気者ですね)

（なんか凄い視線感じるんだが・・・

ミズキやその他はともかく

前の猫女からは殺意が感じられるぞ・・・）

「じゃあ自己紹介は終わり

今日はプリント配布して解散だよ

レギナ君手伝って！」

「何故に俺？

もつと近くの奴がいるだろ？」

「レギナ君がいいの！

よろしく」

「訳わからん」

（ううう）

リヨウが確実に先生に気に入られちゃったよ）

（プリント多いわ！軽く十枚はあるじゃねえか）

「さて終わりましたし帰りましょうか」

「そうだな・・・」

「まだ文句言っているのですか？」

「当たり前だ！

なんで俺が手伝わないとダメなんだよ！
一回や二回じゃねえんだぞ！」

「まあ気に入られたからとしか言いようがありませんね！」

「ハア

もういいや

さっさと帰るか」

「リヨウ」

私も荷物取りに行つていい？」

「あゝ

そうだったな
忘れてた

別に俺がおまえの部屋に持つて行つてもいいけど？」

「本当！？

じゃあお願いするね」

「了解」

「こちらの方がリヨウの幼なじみの方ですか？」

「ああそうだよ」

「あ！

リヨウの友達？

私はリヨウの幼なじみのシューリ・ク・ミズキって言います
よろしくね！」

「僕はリヨウと同室のグラゴ・ル・シュウといいます
こちらこそよろしく願いしますねミズキさん」

「そつえばおまえの部屋は何号室なんだ？」

「え」と

215号室だよ」

「了解

じゃあ帰ったらすぐに行くよ」

「ありがとう

じゃあまた後でね

シュウさんもまたね」

「シュウで構いませんよ」

「じゃあ私もミズキって呼んでね」

「はい」

「じゃあ行こうぜシュウ」

「それではまた明日」

「バイバイ」

「仲がいいですね
付き合っているのですか？」

「俺がミズキと？
ありえね〜」

まあ・仲がいいのは認めるけどな小学校からの付き合いだし」
「そうでしたか」

（ミズキは明らかにリョウに好意を持っているように見えましたけどね

・・・リョウは鈍感なんですかね）

「リョウ

ミズキの前ではありえないとか言っではいけませんよ」

「なんで？」

「女性に対する礼儀ですよ」

「よくわからんが
気をつけるよ」

「約束ですよ」

（本当に気付いていないようですね・・・）

「それにしてもおまえが初対面の女を呼び捨てにするとは思わなかったよ」

「あちらが呼んでと言われたのだから呼ばないのも失礼なので」

「女性への礼儀ってか？」

「そうですね」

「よくいちいちそんなこと
気にしてられるよな・・・」

俺には無理だ」

「リョウも気をつけた方がいいですよ」

「まあ気が向いたら・・・かな
後おまえは俺だけでも敬語なしで話せないか？」

「これは癖でして・・・」

「家でもそういう話し方なのか？」

「はい

そういうのには厳しい親でして……」

「じゃあしょうがねえよな……」

「すいません」

「別に謝ることはないさ」

「ありがとうございます」

ミズキさんの部屋へ荷物を持って行くのでしたよね？」

「そうだな

じゃあ行つて来るよ

そういえば今日の晩飯はどうする？」

「材料もないので

食べに出るか出前を頼むかどちらかですね」

「じゃあ食いに行こうぜ

そのまま明日の材料買いに行つてさ」

「それがいいですね

じゃあ僕もついて行きますよ」

「そっちの方が早いな

じゃあ行こうぜ！」

ピンポン

リ

「やっと着いた・・・

なんでここに来るまでにこんなに疲れないといけないんだ？中学でもだが女子つてのは騒がしいよな」

シ

「さすがにきついですね

リヨウのせいですよ」

（リヨウは自覚してないようですがリヨウはかなりの顔だから女子の方々が騒いでいたんですけどこのことをリヨウに言っても意味がないでしょうね・・・）

リ

「なんで俺のせいなんだよ！」

ユ

「はい

ってなんであなたがここに居るのよ！」

リ

「ミズキに荷物持って来たんだよ・・・」

（マジでうるせえ

何なんだよいちいちさっきまでとはまた違うタイプの騒がしい女子だな）

ミ

「リヨウ」

ありがとう

あれシュウも来たんだ」

シ

「はい

これからリヨウと晩飯を食べに行こうと思ひまして」

リ

「だからシュウにもついて来て貰ったんだそっちの方が早いからな」

ミ

「食べに行くの？」

私達も一緒に行ってもいい？」

リ・ユ

「「え？」」

ミ

「駄目？《うるうる》」

シ

「僕は構いませんよ

寧ろ一緒に行きたい位ですよ」

リ・ユ（こいつさえ居なければ・・・）

ミ

「リヨウ・ユキ一緒に行こう」

ユ 「仕方ないわね・・・」

ミ 「リヨウは嫌？」

リ 「ハア
分かったよ一緒に行くか」

ミ 「本当！？
やったー！」

シ 「僕はグラゴ・ル・シュウといいます」

ユ 「私はルルナ・ス・ユキよ
ユキでいいわ！よろしくね」

シ 「では僕のこともしュウをお願いします」

リ 「じゃあ行こうぜシュウ・ミズキ・・・・・・・・猫女」

ユ 「誰が猫女よこのバカ男！」

リ

「おまえしかいねえだろ！
第一俺はバカじゃねえ！」

ユ

「私だって猫じゃないわよ！」

リ・ユ（こいつ・・・気に入らない（怒）（

ミ

「ねえねえ

何を食べに行くの？」

シ

「まだ決めていないんですよ
とりあえず食べた後に必要な日用品や明日から必要な食材を買いに
行くことになってはいますが・・・」

ミ

「本当！？

私達も日用品買いに行かなきゃって話してた所なんだよ！ちよう
どいいや」

火花を散らして言い合う二人とは逆にこちらはのほほんとした雰囲気
気で仲良くなっていた

道中リヨウとユキは永遠と喧嘩をしていたがなんとか
近くの大きなショッピングモールに着いて

リ

「早速だけど

何を食べる？ミズキ・シュウ」

ユ

「私はミズキとシュウが食べたい物でいいわよ！」

リ

「おまえはどこまで張り合っ気だ！」

ユ

「あなたが先に言ったんじゃない！」

ミ

「ふえ」

仲良くしようよ二人とも」

シ

「そうですよ

楽しみましょうよ」

リ

「わかったよ

じゃあおまえが決めていいぞ」

ユ

「いいわよ

あなたが決めなさいよ」

リ

「いって

せっかく人が譲ってるいるんだから遠慮するなよ」

ユ

「遠慮しているのはそっちでしょう」

リ

「せっかくおまえに譲ったんだからおまえが決める！」

ユ

「私はなんでもいいからあなたが決めて！」

リ（この女（怒）．．．．．いや落ち着け．．大人になれ
そうだCoolになれ

俺の目の前にいるのは猫そうCatだあいつは人語がまだ理解できていないんだ．．．．．よし少し落ち着いた）

ユ

「決めたの？」

リ

「おう決めたぜ」

ユ

「そう

結局何にしたのよ」

リ

「そうだな

中華が食べたいかな」

ユ

「嫌よ

私は中華の気分じゃないわ」

リ

「おまえなんでもいって言っただろ！」

ユ

「でも中華は嫌なの！
察しなさいよ」

リ

「ふざけんな

どうやって察するんだよ！なんでもいって言ったんだから責任を
持て！」

ミ

「ふえゝ

落ち着いてよゝ

喧嘩は駄目だよ！」

リ・ユ

「「俺（私）は悪くねえ（ない）」」

シ

「いい加減にしましょうか
二人とも? 《黒笑》」

リ・ユ

「「すいませんでした」」

ユ

「シュウって黒属性だったの?」

リ

「しっ! 聞こえるだろうが」

シ

「何か言いました? 《黒笑》」

リ・ユ

「いえ! 何も」

リ

「し、しかたないな
じゃあ中華はやめて
イタリアンはどうだ?」

ユ

「そうね!」

シ

「やっと決めましたか・・・では早速行きましょう」

リ・ユ
「了解」

三人は歩き出した

リ
「ってミズキ？
何止まっているんだ！？行くぞ！」

ユ
「何してるのよ」

ミ
「ふえ〜
恐かったよ〜（泣）」

リ
「ああ・・・それはしかたないよな？」

ユ
「そうね
私も恐かったし・・・」

リ
「よしよし大丈夫だから行こうね？」
ミズキの頭を撫でる

ミ
「うん／＼」

それよりいつの間にか二人とも仲良くなったね」

リ

「……これ以上喧嘩したらどうなることやら」

ユ

「……そうね」

リ

「あゝまあ悪かったなルルナ」

ユ

「こっちこそ

後ユキでいいわよ

私はリヨウって呼ばして貰うわね」

リ

「了解」

シ

「仲良くなった所で早く行きましょう」

ミ

「お腹空いたゝゝ」

ユ

「イタリアンの店はあるわよ」

リ

「じゃあさっさと行いっぜ」

こうして三人は店に向かった

三人（特にリヨウとユキ）はシュウの恐怖を心に刻み

10（後書き）

リヨウ&シュンの雑談会（１）リヨウ：まだ魔法が出てきてないが・・・いつ出て来るんだ？シュン：確かまだ２、３話はないらしいですよ。リヨウ：おいしい、一応魔法をメインにしておいて話しが２桁を越えてなお魔法が出ないってどうよ・・・シュン：しかたありませんよ・・・作者が無能で出そうとはしているのですがタイミングを逃してしまっただけなので・・・リヨウ：どのタイミングで出す気だったんだ？シュン：本来はリヨウとユキの口喧嘩を魔法バトルに発展させる気だったらしいですよ！リヨウ：作者が無能で助かった・・・シュン：まあいい加減に魔法を使わして欲しいですね。１５話までに出さなければ・・・ふふふ（黒笑）リヨウ：恐いって・・・まあこれから気長によろしくな！シュン：感想や評価をお待ちしております！リヨウ：ちなみにこのくだらん雑談会は作者の気分で行うらしいぞ・・・シュン：こんなページまで読んでいただきありがとうございます・・・リヨウ&シュン：ではこれからも聖フィオルネ学園をよろしく頼む／よろしく願います

リ

「俺は・・・ペスカトーレにするか
後ピザかな」

シ

「僕はナポリタンにします」

ユ

「ちよつと」

スパゲティーといったらミートソースでしょ？」

ミ

「私は・・・
はわわ」

リ

「はいはい

ミズキはカルボナーラがいいんだろ？」

ミ

「うん」

ユ

「あなた達本当にカップルみたいね」

ミ

「ふえゝゝ／＼」

リ

「カップルは初めて言われたなあ
たいていは兄弟なんだけどな」

ユ

「・・・そう」

（当たり前じゃない！

どっからどう見ても兄弟の方が近いわよ

あなたの反応を見たかったのに・・・予想以上の鈍感ね）

ミ

「・・・兄弟」

（リヨウは私のことは妹としか見てないんだろうな・・・）

シ

「僕もカップルに見えましたよ」

（なるほど・・・ユキのしたいことがわかりましたよ僕もリヨウの
反応を見たいですから悪ノリしてみますか）

ユ

「でしょう？」

（わかってるわね

もっと真面目な男と思っていたけど以外に話しが合うかもね）

リ

「そうか？」

じゃあ本当にカップルになるか！？」

ミ
「ふえ！／＼／」

ユ
「は！？」

シ
「ええ！？」

ミ
「リヨウがいいなら『冗談だよ！そんなに驚くなよ』……そ
うだね」

ユ
「こおつのバカ男」
バキッ

リ
「いつてえ！
何すんだよ！」

リヨウにユキが繰り出したアッパーが綺麗に決まった

シ
「今のはリヨウが悪いですよ
むしろそれで済んでよかったですね」

リ
「な！？
ちよつとした『冗談だろ！
そんなに怒ることないだろ？』」

ユ

「言っていい冗談と悪い冗談があるのよ!」

リ

「今のはおまえらが振って来たから乗ってやったんだろうが!」

シ

「そろそろリヨウは黙りましょうね（黒笑）」

リ

「……わかったよ」

ユ

「まったく」

「ミズキに謝りなさいよ!」

リ

「はあ!?!なんで『リヨウ?』ミズキ!すいませんでした」

シ

「それでいいですよ」

ミ

「……うん」

「リヨウは悪くないよ?」

「勝手にリヨウの言葉に期待した私が悪いから」

「ユ（それってほとんど告白じゃない!?」

「さすがにここまで言えばリヨウも……」

シ（大胆ですね
さすがのリヨウもこれなら・・・）

リ（期待？
何だ期待って）

ユ・シ（絶対にわかってないわね／ませんね
最強レベルの鈍感みたいね／ですね）

店員

「お待たせいたしました」
慣れた手つきでテーブルに料理を並べていく
ちなみに席は

リヨウ——ミズキ
シュウ——ユキ

となっている

リ
「うわ旨そうだなあ」

シ
「そうですね」

ミ
「わあゝすごい！」

ユ
「期待以上ね」

「「「いただきます」「」」

リ

「へえ、こんな旨いの初めてかもなあ」

ミ

「美味しいの？」

リ

「食べるか？」

はい！」

ミ

「ええ／＼いいよお／＼」

リ

「遠慮するなっ
てはい！」

ミ

「いいて／＼」

リ

「要らないのか？
じゃあ俺が」『やっぱりいる！』・・・どっ
ちだよ
結局いるのかよ
最初から遠慮せずに食べるよな！
はい！」

ミ
「あ あ〜ん／／」
パクッ

リ
「旨いだろ？」

ミ
「うん／／」
（ふえ〜味なんてわからないよ〜）

シ
「今度はカップルに見えますよね」

ユ
「それもバカップルね
見てるこっちが恥ずかしいわ」

ミ
「リヨウ／／」

リ
「何だ？」

ミ
「わ 私のも一口いる？／／」
ユ（ミズキも頑張るわね〜）

リ
「俺はカルボナーラは余り好きじゃないって……おまえは知っ

てるだろ？」

ミ

「あっそうだったよね（シュン）」

ユ（このバカ男！）

シ

「リヨウ？」

そう聞かれた場合は食べるのが女性への礼儀ですよ（こそこそ）

リ

「そうなのか？」

知らなかった・・・もう遅いか？（こそこそ）

シ

「今からでも遅くありませんよ（こそこそ）」

リ

「わかった（こそこそ）」

リ

「やっぱりたまにはカルボナーラもいいかもな」

一口くれるか？（棒読み）」

ユ（せっかく言うならもつと感情込めなさいよね・・・本当にあんな嘘に騙されるなんて・・・バカなのかしら？）

ミ

「ふえ？いいよ！

はい！あ~~~~ん／＼

（手が震えるよお）

パクッ

ミ

「ど　どう／＼？」

リ

「・・・・・・旨いな

初めてカルボナーラを旨いと思ったよ」

ユ

「ミズキに食べさせて貰ったからじゃないの？」

ミ

「ユ　ユキ！？／＼」

リ

「ミズキに食べさせて貰ったら普通に食うのと味が変わるのか？」

ユ

「そりゃあ

もちろん！」

シ

「リヨウ！

そこはミズキにお礼を言う所ですよ（こそこそ）

リ

「わかった（こそこそ）
ミズキありがとうな
美味しかったよ」

ミ

「ふえっ！／＼／」

リ

「ミズキ？」

ミ

「ふえ／＼／／」

リ

「シュン！
ミズキが固まったぞ！
どうすればいいんだ？（こそこそ）」

シ

「食べさせて貰った後はお礼に頬にキスをして上げるのが礼儀ですよ（こそこそ）」

リ

「まじで？（こそこそ）」

シ

「ミズキは固まっているのではなくお礼を待っているのですよ（こそこそ）」

リ

「そうだったのか・・・わかった！やるよ（こそこそ）」

シ

「頑張ってください！（こそこそ）」

リ

「ミズキ」

ミ

「ふえ？／＼どうしたのリヨウ？／＼」

リ

「カルボナーラサンキューな」

チュツ

ミ

「・・・／＼／＼（ぱくぱく）」

ユ（本当に騙されると思わなかったわ・・・）

シ（・・・リヨウってバカなんですかね？）

リ

「ミズキ？」

シュン！ミズキが気を失ったぞ！？」

シ

「それでいいんですよ

早く食べないと伸びますよ？」

ユ

「あなた酷いわね・・・」

シ

「しかたありませんよ」

リ

「伸びるのは嫌だな
さっさと食うか」

ミ

「・・・キュー／／／／／」

11（後書き）

リヨウ&ミズキの雑談会〜リヨウ：今回はミズキか・・・ミズキ：うん頑張るねリヨウ！リヨウ：別にこんな雑談会で頑張ることなんてない・・・作者も気分とか言っていた癖にすぐにするなよ・・・めんどくさいミズキ：えっとね〜確か魔法の技名をどんなのにすればいいのかわからないらしいよ〜リヨウ：成る程・・・それで読者に意見を貰おうって魂胆だな・・・ミズキ：そうみたいだね〜リヨウ：つたく本当に無能な奴だな・・・ミズキ：リヨウ〜もつとオブラートに言わないと流石にかわいそう。リヨウ：例えばどんな風に？ミズキ：えっと本当に能力が無い人だねって感じ？リヨウ：・・・何が違うんだ？ミズキ：ふえ〜難しいよ〜。リヨウ：おまえから言い出したんだろ？ミズキ：もういいよ〜〜とりあえずもう締めるよ〜？リヨウ：勝手にしてくれ。ミズキ：わかった！えっと感想や評価をお待ちしております！リヨウ：・・・あえてツツコムまい。ミズキ：うう〜締めで噛んじゃった〜〜リヨウ：まあこれからこんな作者だがよろしく頼む。ミズキ：結局リヨウが締めちゃった〜リヨウ：うるせえ！どうせまた噛むだろ！ミズキ：もう一度言わせて〜。リヨウ：噛むなよ？ミズキ：次こそ・・・ええと感想や・評価を・お待ちして・おります！リヨウ言えたよ！リヨウ：そりゃそれだけ区切って言えばな・・・じゃあまた今度意見頼むぜ！ミズキ：お願いしましゅ！はうう・・・

シ

「美味しかったですね〜
また来たいと思いますよ」

ユ

「そうね
機会があつたらまた来たいわね」

シ

「リヨウ？」

歩くのが遅いですよ」

ユ

「さつさと歩きなさいよ」

リ

「てめえら……しばらくぞ！
何で俺がミズキを背負わないといけねえんだよ！」

ユ

「あら？
女に背負わす気なの？」

リ

「じゃあシュンが背負え！」

シ

「いえ

ミズキを気絶させたのはリヨウなのですから
リヨウが背負うのが道理つてものですよ」

リ

「ミズキが勝手に気絶したんだから

俺は関係ねえ！

さつきから生暖かい視線を感じて不愉快なんだよ！」

ユ

「そりゃあねえ……こんな所で男が女を背負って歩いてい
れば

そんな視線を感じるに決まってるじゃない」

リ

「じゃあ代われよ」

ユ

「嫌よ

まあせつなくなんだししっかり感触を楽しむことね」

シ

「そんなことより早く明日からの食材を買いに行きましょう」

リ

「そんなことで済ますなあ！」

ユ

「うるさいわよ！」

じゃあシュンと食材買いに行って来るからあなた達はそのベンチに居なさい」

リ

「いいのか！？わかった」

ユ

「それとミズキが起きたらミズキが行きたいって言う所にも着いて行ってあげなさいよね」

（もう起きてるけどね・・・）

シ

「じゃあ行つて来るので

・・・頑張つて下さいね」

ミ（うう／＼／

二人にはばれているよ／＼／

リ

「頑張るって何をだ？」

ユ

「あなたは気にしないでいいのよ
じゃあまた後でね」

リ

「・・・何だあいつら？」

ミ（はわわ／

そつえばどのタイミングで起きればいいんだろ／＼／

リ

「ハア

ミズキは起きないし………寝るかな」

ミ

「駄目だよ!」

リ

「うお!?

お 起きたのかよ
いきなり驚かすなよ」

ミ

「はわわ／＼」

(いきおいに任せて起きちゃったよ／＼)

リ

「何が駄目なんだ?」

ミ

「ふえ?」

リ

「いやだって駄目だよ!って言いながら起きたから……」

ミ

「え……っと……その「はわわ」どう言えばいいのかな」

リ

「寝ぼけてたのか？」

≡

「・・・うん」

リ

「まあいいや

日用品でも見に行くか？」

≡

「うん！」

リ

「じゃあ行くか！

何か見たい物でもあるのか？」

≡

「え・・・と

とりあえず服が欲しいかな！？」

リ

「持って来なかったのか？」

≡

「とりあえずは持って来たけど・・・」

リ

「あゝ

わかったよ

じゃあ行こうか」

三

「うん！」

でもどこがいいのかなあ？」

リ

「あつちに有名な店あるらしいぞ
……さっさと行くか」（確か女と二人で歩く時は手を繋いで歩くのが礼儀だって言ってたよな……）

ミズキの手を掴み歩いていく

三

「ふあゝ／＼」

（リヨウと手を繋いでいるよ）

「これ似合う?」

「似合うんじゃないのか?」

「本当!?!」

「……嘘言ってどうするんだよ」

「えへへ／＼
じゃあ買おうかな」

「買うのか?
すでに十着は買っているじゃねえか」

「リヨウが似合うって言うてくれたからね／＼」

「わかったからじゃあ早く買ってきて来い」

ミ

「えへへ／＼
じゃあ買って来るね」

リ

「・・・ったく

お？これは・・・」

リヨウの目に入ったのは

青い宝石のネックレスだった

リ（・・・）

ミ

「リヨウ？」

リ

「うわ！いきなり覗き込んで来るな！」

ミ

「ふえっ

ごごめん」

リ

「買ったのか？」

ミ

「うん！

お願いね」

リ

「しかたないな」

ミズキから荷物を受け取り

「シャドウゲート影扉、」

リヨウが唱えると

リヨウ自身の影が黒く深くなった

リヨウはそこに荷物を入れる

店員

「あらまあ

そりゃあんたの魔法かい？

珍しい魔法を使うねえ」

リ

「まあね

これは「影扉」と言って自分の影を四次元につなげることができ
るんだよ！」

ミ

「本当に便利だよね」

店員

「そりゃすごいねえ

あんたも彼氏が居れば買い物も楽になるわねえ」

ミ

「か 彼氏／＼／」

店員

「何だい

違ったのかい？」

リ

「こいつとは幼なじみだよ
行くぞミズキ」

ミ

「リヨウが彼氏リヨウが彼氏………//」

リ

「ったく」

ミズキの手を引つ張り店を後にする

店員

「また来てくれよう」

シ

「……」

ユ

「それは駄目よ
熟れすぎていて冷蔵庫に入れたら傷むかもしれないからこっちにしない」

シ

「成る程
後キュウリと」

ユ

「それだったらこっちの方がいいわよ
キュウリは刺みたいなのが痛い位なのが新鮮なのよ」

シ

「勉強になりますね
ユキはきつといい奥さんになりますね」

ユ

「な 何言っているのよ／＼」

シ

「思ったことを言っただけですが……
おっとまだ色々と買う物がありますね急ぎましょう」

ユ

「ゆっくりでいいわよそれよりもミスキは上手くやっているのかしらね？」

シ

「大丈夫ですよ
……多分」

ユ

「だといいのけど・・・
だからそれはこっちの方がいいの」

シ

「・・・難しいです」

13（後書き）

「リヨウとミズキの雑談会」リヨウ：ようやく魔法が使えた・・・
が何だ？この雑用に最適な魔法は？ミズキ：えへへ！すごい助かるよ！リヨウ：もしかして昔から事あるごとに俺を買い物に付き合
わしていたのは・・・ミズキ：違うよ！それも少しはあるけど・・・
（一番はリヨウと一緒に買い物に行きたかったからだよ！／＼でも
こんなこと言えないよ！／＼）リヨウ：まあいいが・・・ちなみに
学園に来る時も自分の荷物は影に入れて来たぞ・・・作者が書き
忘れていたが・・・ミズキ：ちなみに闇の魔法なんだよね？リヨウ：
ミズキ・・・それは軽いネタバレだぞ・・・ミズキ：はわあ！リヨ
ウ：まあ別にいいと思うが・・・ミズキ：でも魔法の話なのに魔
法が出ないよね！リヨウ：そうだな・・・ミズキとの絡みが多い気
がするな・・・それを無くして早く魔法バトルにでも進んで欲しい
よなあ！ミズキ：はわわ！やっぱりゆっくりでいいよ！リヨウ：な
んでいきなり言っていることが変わるんだよ！？ミズキ：いつも魔
法学園聖フィオルネを読んでいただきありがとうございます！これ
からもよろしく願います！リヨウ：話を反らすな！でも今回
は前よりも長かったのにスラスラ言えたな！ミズキ：えへへ！すご
い？リヨウ：普通だろ！ミズキ：うう！リヨウ：まあミズキにして
は凄いいけどな！ミズキ：えへへ！／＼リヨウが褒めてくれた！／
リヨウ：まあ次回もよろしく頼む

リ

「・・・買い過ぎじゃないのか？」

シ

「僕も買った後に気付きましたよ」

ユ

「シュウったら

食材選びが全くできないのよ」

シ

「はは・・・

買い物したのは初めてなので」

ユ

「初めてだったの？」

リ

「おまえ家って・・・」

シ

「まあ気にしないで下さい

それよりもミズキが大人しいですね・・・

何かしたのですか？」

リ

「さあ

なんかネックレスを上げた途端に悲鳴を上げてからこっなんだよな・

・・」

ユ

「ネックレス!？」

リ

「お・・おう

ミズキに似合うかなって買ったんだよ」

シ

「ふふふ

少しはわかっていないですか」

ユ

「リヨウよくやったわ」

リ

「は　はぁありがとう?」

ユ

「しっかり手を繋いじゃって〜」

リ

「話し掛けても反応しないし

こっしないと動かないんだよ

おまえらも仲良くなっているじゃねえか!」

シ

「そうですね

楽しかったですよねユキ？」

ユ

「べ 別に楽しくなかったわよ／＼」

リ

「へえゝ（ニヤニヤ）」

ユ

「な 何よ！」

リ

「素直になれって（ニヤニヤ）」

ユ

「うるさい／＼！」

（自分のことは鈍感なくせに・・・）

シ

「用事は済みましたし

今日は帰りますか・・・」

ユ

「そうね

ミズキも戻って来なさい！」

ミ

「・・・／＼／」

ユ
「無理みたいね」

リ
「言っただろ？」
おまえがいるならおまえがミズキを引っ張ってくれ」

ユ
「駄目よ
ほらシュン早く帰りましょう」

シ
「そうですね
行きますよりヨウ」

リ
「おい！
なんで俺が引っ張らなきゃいけないんだ！」

ユ
「食材選びする時はまた着いて行ってあげるわ」

シ
「ありがとうございます
まだよく選びがかたわからないので助かります」
二人はリヨウを無視しえ会話に花を咲かしている
リ

「無視すんな！」
二人に怒鳴るが二人は無視して先々進んで行く

リ

「くそ！」

ミ

「・・・／／／」

リヨウはミズキを引っ張り帰路に着いた

14（後書き）

シュウと部屋にて・（就寝前）リョウ：今日会ったとは思えないぐらいにユキと仲良くなっていたな（ニヤニヤ）シュウ：そうですね・・・もう眠いので静かにして下さい。リョウ：このまま付き合えるんじゃないのか？（ニヤニヤ）シュウ：だいいいですね・・・おやすみなさい。リョウ：無視かよ（シュウ：しつこいですよ！僕は眠いんです（黒笑）リョウ：わ・わ・わ・悪い！おやすみ）シュウ：最初からそうして下さいよ・・・ZZZ。リョウ：早！！まあいいや俺も寝よつと・・・ZZZZ

リ

「魔法試験？」

シ

「はい

新入生の実力を知るために一年生が二年生と魔法で実技試験をする
みたいですよ」

リ

「そっかあ！」

シ

「嬉しそうですね」

リ

「まあな」

シ

「でもその前に筆記試験もあるみたいですよ」

リ

「……その言い方だとおまえは俺が筆記がからっきしの馬鹿な
奴だと思っていないか？」

シ

「そんなことはありませんよ」

先生も来ましたし僕は戻りますね」

リ

「お　おい！」

「……………ったく」

ユ

「リョウ！」

リ

「おうなんだ？」

ユ

「赤点は取らないようにしなさいよ」

リ

「おまえらは俺を何だと思ってるんだ！」

モ

「リョウ煩いよ」

後テストのプリントを配るの手伝って」

リ

「なんで毎回俺なんだよ！」

モ

「気にしない気にしない」

リ

「ハア」

半分まででな」

モ

「ありがとう

赤点取るなら多くても二つまでにしときなよ?」

リ

「もおゝ嫌だゝゝゝ!」

モ

「ひゃっ!?

いきなり叫んでどうしたの?」

リ

「叫びたくもなるわ!なんで俺が赤点取る前提なんだ!?」

モ

「・・・・・・え?

取らないの?」

リ

「あんたの俺の印象はよく分かりました・・・・・・」

モ

「えーと

ごめん?」

リ

「なんで疑問形なんだよ!

さっきからシユウといいユキといい俺をなめてるのか!?

俺のピュアなハートはスタボロだ

こうなったら筆記・実技両方でおまえらを見返してやる!」

ビシッと指をさして言う

ユ

「な　なんかごめん」

シ

「リヨウ・・・すみませんでした」

モ

「ごめんね」

リ

「まだ馬鹿にしてねえか？

・・・覚えて置けよ!」

モ

「あ!リヨウのせいで

時間になっちゃうじゃん!

リヨウも早く席に着いて!」

リ

「俺のせいだよ・・・」

渋々と席に着くと同時にチャイムが鳴り響きモモの始め!の合図で

筆記試験が始まった

15 (後書き)

~~~~筆記試験の様子~~~~リヨウ：（これは1番だったよな）  
楽勝楽勝・・・・・・でももしも赤点取ったりなんてしたら俺  
どうするよ？先生やシュウやユキにあれだけ言っというて・・・大恥  
じゃね？赤点だけは避けなければ・・・・ZZZ）モモ：（リヨ  
ウもう寝てる・・・・・・本当に大丈夫かなあ？）シュウ：（ここは  
3番でいいですね・・・・こっちは・・・ふむ思ったより難しいみた  
いですね・・・リヨウは・・・・・・寝てますね・・・あれだけ言っ  
ておいて赤点はないと思いましたけどどうなのでしょうね・・・？）  
ユキ：（ハア・・・何よあいつつたら口ばかりじゃない・・・）ミズ  
キ：（ここってどうだったけ？ふええ全然わからないよ）リヨウ  
助けて）

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連「横書き」という考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、たんのう堪能してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n0409i/>

---

魔法学園《聖フィオルネ高等部》

2010年10月28日08時13分発行